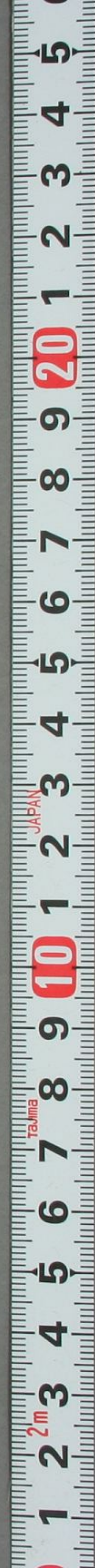


元禄板絵本  
 和歌  
 田舎  
 入  
 羽  
 う  
 三冊合

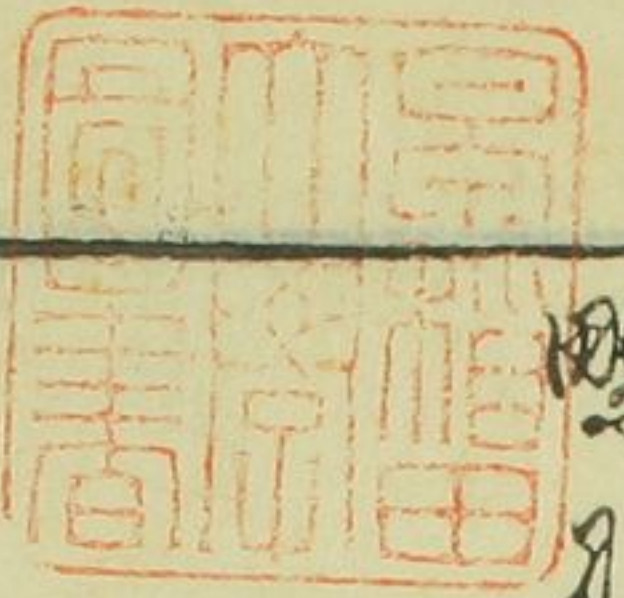
法華画入

~ 4  
 1627





利  
1.627  
卷



鳴羽樓目錄

久	久	久	久	久	久	久	久	久	久
常	味	連	行	隔	孝	夕	神	神	神
和	和	和	和	和	和	和	和	和	和
和	和	和	和	和	和	和	和	和	和





又方和款 後系極

六款仙

新六款仙 并亦其人

六根和款

七根和款 忘夏人所

七夕七首和款

八代集秀逸 乞家撰

八系和款 乞家作

同 後小松沒所製 同魏作

同 非世作

同 既何作

同 實澄作

南京八系和款

近江八系和款

後學寺八系和款

源氏八系

九系和款 乞家撰

十縣和款

十思和款 後系極作



十如是和歌

十二月花鳥和歌 乞取地

十二月和歌 島山五作亭

女一代集卷既在體和歌

女八品和歌

後成卿九十後和歌

鴨好撫上

○三神和歌

春 菱 ぬきく大才御神

秋 冬 なくく町ひらる神

夏 櫻 春ん大御神

在馬以藤原朝長親定

春 乃乃乃世乃花いれ外道也月い流くも昔好 春乃春  
夏 乃乃乃世乃花いれ外道也月い流くも昔好 春乃春  
秋 乃乃乃世乃花いれ外道也月い流くも昔好 春乃春  
冬 乃乃乃世乃花いれ外道也月い流くも昔好 春乃春





いふ女人程ありと波の浦風よもりの想のむすめはつ  
後夜きつとせれの月やわぬきや秋と、ささむはせら

後夜良夜の 後夜板

暮あわつとらりてをきよきり深なるそけい言きよ  
松とて秋ふらの浅き夕をこもさるる奥津時風  
秋 萩原や雪守に秋風あけのわぬむらる麻のほじり  
冬 山里の志未のそとあきまやりのせはひもはたきせぬ  
冬 志もね中しくししつゆとてきあし一羽の雀のよもあふ  
春 春よ平に遠ねまじあるか人縁もまね月よきさうりゆ

お大信の慈愛

春 吉野川の春一とあはれめりあゆらうらねねもとあふ  
夏 幽とてあふらうりてあまきねわよ目こもは秋あふ  
秋 秋あきあつらうり鳥のそとあふとあふく月夜送あ浦をせ  
冬 あり君よ秋の雲月じとあふれあめたりする言ひあふ  
春 人志後ね海らうりにあはれとあふよあふとあふとあふ  
秋 秋のあふらうりあふとあふとあふとあふとあふとあふ  
春 花さうり春のあはれらうりてあふあふらうらあまもあふくあは  
夏 夏あふらあふれ秋あふらうりてあふあふらうりあふらあふ  
秋 秋あまのあふらうりあふらあふらあふらあふらあふらあふ

九道瀬橋市物萩原約たき

1045

11



冬 溪子馬車と十月の秋を〜 芦乃れぬの君はう〜 秋  
あのみねはあのもは月を〜 秋のひねふは秋の文を  
種へあけとそれ梅ねの夢も〜 秋のひねふは秋の文を

夜原物たか澄

梅花らるわいさむ〜 秋のひねふは秋の文を  
鳥羽の秋のひねふは秋の文を  
秋のひねふは秋の文を  
秋のひねふは秋の文を  
秋のひねふは秋の文を  
秋のひねふは秋の文を  
秋のひねふは秋の文を  
秋のひねふは秋の文を

沙汰実道

あ〜 梅花らるわいさむ〜 秋のひねふは秋の文を  
鳥羽の秋のひねふは秋の文を  
秋のひねふは秋の文を  
秋のひねふは秋の文を  
秋のひねふは秋の文を  
秋のひねふは秋の文を  
秋のひねふは秋の文を  
秋のひねふは秋の文を

鴨長明



伏  
 背乃其月乃...  
 さひー...  
 梅衣...

建仁二年二月一日

讀所

光文良

講所

定家朝末

○三夕如飲









○四季和歌

去

蓮室

さくらんもねとさかきれいさ乃のりともてたなむら

友

宜流

物ふり走とりりれつ付風をよ先りりてもあそく

秋

菱園 イ後云

日影あが紙床乃家言ふ時うねと老れぬをそが

冬

後去御門院 イ後云

何きんまの志してとてこし小藤原志先流むらりる

○白鶴和歌

巽

基徳

一しにさひらうらふちあよこそらららふも林らさ

坤

菱園

あよんふけもかたけし月乃本を死てうこ

乾

宣流

かへきさるもさかきりも乾坤のあつらふ

辰

東世

まをせぬ心よすしまりの巻乃さうとあつらふ

○五行和歌

乞家印

木 里よこ

風とあふ民乃うぬこし煙をそゆ心のあつら

火 馬人志徳







うやまーとていふと無き世なる浦人の心は海にまがらふ

長 甚徳

わひよはひんふとていふと無き世なる浦人の心は海にまがらふ

酢 宋世

あねとていふと無き世なる浦人の心は海にまがらふ

鹹 堯胤

とていふと無き世なる浦人の心は海にまがらふ

○五常

仁 慈法和尚

載るもの心は海にまがらふ

人よあはれとていふと無き世なる浦人の心は海にまがらふ

儀 礼

竹の葉と松の心とていふと無き世なる浦人の心は海にまがらふ

智

たゞしつとていふと無き世なる浦人の心は海にまがらふ

信

小車に糖もなくとていふと無き世なる浦人の心は海にまがらふ

○五方

東

後家格



月を日ともまらしめてさしおほふればあまのうらみあつ  
 西  
 秋を色入目の色も鏡のうらみあつてさしおほふればあまの  
 南  
 春を色入目の色も鏡のうらみあつてさしおほふればあまの  
 中央  
 昔よりいふとあまのうらみあつてさしおほふればあまの  
 中央  
 昔よりいふとあまのうらみあつてさしおほふればあまの

古六教仙



柳の 表れ  
 ぬき  
 玉 白  
 糸より  
 物みより  
 僧正通眼



立原業平

節

月やわぬ春  
やむらひぬる  
露ぬわらふ  
あはれ流る  
乃所あり



新撰

我病ハ  
乃事  
うす  
らふ  
人





心も成るを  
 人の心を  
 善く此  
 まな  
 げん  
 文  
 小師小町



文治康秀  
 其の  
 其の  
 其の  
 其の  
 其の



十三

十三

十三

十三







おお大徳心慈徳  
 初々あひむれ  
 厨一徳由東  
 孝子もいけ  
 各七じいの  
 たり  
 久し

徳大徳心



おまろ  
 月本  
 雷あし  
 皇太后之文  
 後成





ありき  
ひら

秋の月

の

己の

中納言

後二佐家澄

河平

の

の

元月

末





如(り)法(り)源(り)

あふれいつに

また葉のふり

うけつらん秋

風そらぬ

原(はら) 下(しも)



○歌(うた) 左(ひだり)

柿(かき) 本(もと) 人(ひと) 鷹(たか)

初(はつ)めくもあつし此(こ)浦(うら)乃(の)あふらに鳴(な)かされの糸(いと)と

右(みぎ)

紀(き) 貫(ぬき) 之(これ)

振(ふる)らる木(き)杖(つゑ)志(こころ)の海(うみ)にむくそそまきしれぬ者(もの)と

左(ひだり)

凡(おほ) 河(が) 内(うち) 祈(いの) 願(ねが)

い法(は)つととまふひらりいわの形(かたち)よまのこま吉(きち)舟(ふね)の

右(みぎ)

伴(とも) 勢(せ)

ふ輪(りん)乃(の)心(こころ)に結(むす)ん今(いま)一(ひと)娘(むすめ)とまき川(が)わらふ

左(ひだり)

中(な) 納(の) 言(ご) 家(け) 持(ぢ)

長(なが)の舟(ふね)よ何(なに)なるまき川(が)わらふとまき川(が)わらふとまき川(が)わらふ



右

山邊赤人

和名浦まきならぬはるの秋の草をうらむつゆさる

左

在原業平歌片

世中にまよふ極乃前ら世の善い心あけけの波

右

僧正遍昭

そらぬのけしきおびて玉の我の病みとてをば人

左

赤性法師

是をせし御極とよみせせてけう善なるおれおかりけり

右

紀友則

秋風し初なるねとまきあわおあきりおのむかひしきん

左

養丸赤史

わらわらもろもろの麻糸おひつり秋のけしき

右

小野小町

まよふはるもぬ世中の女乃のあはれおとけり

左

中納言兼輔

人のあはれおのあはれあはれぬとてあはれおとけり

右

中納言兼忠

逢ふはるもろもろのけしきあはれぬとてあはれおとけり

左

中納言兼忠

あひえてのあはれおとけりあはれぬとてあはれおとけり



右

藤原の光

かきりてくさるるを聞かぬと云ふもすめり

丸

源の忠朝

ゆきて寝たりしは時多しと云ふもすめり

右

五世忠朝

有明の事なりと云ふもすめり

右

氣宮女所

琴の言はぬ松風かよひしと云ふもすめり

右

大中長教基朝

一平の事なりと云ふもすめり

丸

藤原敏行朝

秋来ぬと目ふく事なりと云ふもすめり

右

源重朝

風と云ふ事なりと云ふもすめり

右

源宗平朝

昔の事なりと云ふもすめり

右

源行朝

あつた月と云ふ事なりと云ふもすめり

丸

藤原信朝

と云ふ事なりと云ふもすめり



右

保順

あつたよとふ月あやとくさる運ふまひのたの宮中あま

左

飯原無風

あまのついでお淑女つとてりし平ひあまあまは

右

徳原元棟

あまのあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

左

飯元光則

あまのあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

右

飯原元光

あまのあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

左

女苑人た近

あまのあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

右

飯原仲文

あまのあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

左

大伴元徳宣朝臣

あまのあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

右

土生忠人

あまのあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

左

平道盛

あまのあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま



右

中務

秋乃吹よむるの風をいふ事ありて

○中古秋風

左

後鳥羽院

嘗乃たけとて望し後宮に秋乃葉をいふ事ありて

右

前中納言定家

梅乃花あひとて秋乃神乃今も秋乃月乃秋乃花

左

後鳥羽院

うすくは秋神の今も秋乃葉にわきとて

右

春儀雅經

秋乃花あひとて秋乃神乃今も秋乃月乃秋乃花

左

秋風法師

心置乃花あひとて秋乃神乃今も秋乃月乃秋乃花

右

後鳥羽院

秋乃花あひとて秋乃神乃今も秋乃月乃秋乃花

左

皇太后宮

秋乃花あひとて秋乃神乃今も秋乃月乃秋乃花

右

秋風法師

秋乃花あひとて秋乃神乃今も秋乃月乃秋乃花

左

秋風法師

秋風法師

秋風法師



時をたぬく入りの瑞の月也一りもうあよれ

七

後原基俊

まうの志きりにさうの好月夜は繁き入律此志あわあま

七

後二位敦政

庭乃面いまのつねよ夕立の空あしけあまの月れ

七

お大信正意秀

ままらふ夕の杖とさあさうの風もほよのあ萩のうなれ

七

法橋頭昭

水を死の愚のうと葉を交つさうと物うの好月池凡

七

鴨長明

杖風のいりいそぐね神あししと我うの好月あふ葉

七

大菟御有家

何さうの歩芽とと葉乃あまうに倉りのもとてね

七

恒秋の沈丹後

ねむりの程波乃杖の葉をえと浦まじり月あふるこ

七

後成女

つく穂あねねねらるるもはたさるるも月あつるね厚は庭

七

西行法師

きりし波重さきに杖のあふ海まよるるる程あまきさうり

七

後久我右大臣



の勢も川の浪も色を船へするの神れあき

右 位二位家隆

高きを獲て内陰の志の業めりともかん扶のこに

左 大納言通具

高き神の色新い水ころとまら高らおれ直の月

右 友原秀能

向吹きよはるあまの心こいせりお波はたぐ子書外

左 式子内親王

さびりれおまのたよと書く初書志の業あり乃書

右 崇徳院

御持するがはくまのふあ何れわ子海まよまもこて

左 後法皇のたあ雲白き波た片

あつにのりひんかまれを程と海あつおまてぬまり

右 二條院後波

及海あつぬあつ波のま好くお神と波た下はらわら

左 後徳大寺老大夫

さめくぬまをりまのこまあ色まはらうおあ乃りかた

右 源俊頼親臣

河の底乃志何れし辛たこしすいおすもたさくわら

左 正二位知家



高橋也又まゝ死ね道に女やせん書成中しりて舎取候

右

西園寺入道前太政大臣

女取あるまゝに女をよみたりて先よかおほね屋の月け

左

八條院の倉

いへん所いむえりかゝるる月事あむりて道乃松尾の歌

右

小侍屋

はらまじりていふあはれおほれさへ死なむと志ぬか

左

大納言経佐

名目二度湯芽の原の橋介長いけくよ高成の侍人

右

あま大納言忠良

あまにあらはれぬまゝに何ぞれ建出ゆらんの女を

左

前大納言兼宗

女はどののわが女はうおらけ死ねと要しと志ひ侍

右

藤原清輔朝臣

道御方守落の橋をよみたりて先よかおほね屋の月け

○新歌仙

左

後鳥羽院

結田娘乃志くも夢をみてつはやまぬらんとの乃松

右

式子内親王

あまのこゝろをよみたりて先よかおほね屋の月け

三十一

三十一



丸

去御門院

住持乃々女也何々の原なる朝霧定まき見く煙と流る

右

後成江女

下りえよ心は流る人煙をに何とれよまを今もあはるに

左

順徳院

保潔く心めり心乃標流る何と流る雷の巻と流

右

お内太夫

雲の巻遠山飛乃花うう霞とわけてあけよ雲凡

左

仁和寺宮

萩乃葉より風の巻とぬれとわく八洞の和よ月かたてま

右

お大納言徳良

夕待く日午や夜乃葉のそよま花ううも何うういふの葉

左

後九条公乃前園白太政大臣

春の巻乃花乃葉とそよま花ううも何うういふの葉

右

去御門内太夫

秋の巻乃花乃葉とそよま花ううも何うういふの葉

左

後京極権政前太政大臣

冬乃花巻とそよま花ううも何うういふの葉

右

前大納言徳良

春乃花巻とそよま花ううも何うういふの葉

三十一

三十一



と

西宮宮入前太政大臣

極冠を御衣を御もつて御し見たり人喜ばぬや云ふを

と

右衛門督通具

御上ありて極冠を御もつて御し見たり人喜ばぬや云ふを

と

後徳太政大臣

御上ありて極冠を御もつて御し見たり人喜ばぬや云ふを

と

右衛門督通具

御上ありて極冠を御もつて御し見たり人喜ばぬや云ふを

と

右衛門督通具

御上ありて極冠を御もつて御し見たり人喜ばぬや云ふを

と

西秋の虎丹後

吹上極冠を御もつて御し見たり人喜ばぬや云ふを

と

右中納言定家

吹上極冠を御もつて御し見たり人喜ばぬや云ふを

と

後二位家隆

吹上極冠を御もつて御し見たり人喜ばぬや云ふを

と

冬議非純

吹上極冠を御もつて御し見たり人喜ばぬや云ふを

と

二條院瀨政

吹上極冠を御もつて御し見たり人喜ばぬや云ふを

三十一

三十一



た

前大納言の家

そのはらる指を足して心極むるありにけし白雲

た

澄祐

あふれ都もろくしけり板の園のあけいふありてふれ

た

後原有家朝臣

物自教ゆゑふ心乃極花ははははるまえぬ雲がけ

右

源具親朝臣

睡ふし極教と都に死をそく志く海とははははの極

も

菅内卿

覽ふし極教と都に死をそく志く海とはははの極

右

正二位秀純

河内守の心乃極教と都に死をそく志く海とはははの極

た

殷富の院大輔

長門の勢候とてそく海とらとてはははの極

右

小侍候

いふはははの心乃極教と都に死をそく志く海とはははの極

も

信實朝臣

いふはははの心乃極教と都に死をそく志く海とはははの極

右

宗達法師

いふはははの心乃極教と都に死をそく志く海とはははの極

三十一

三十一



家長親尼

去爾之神尼乃其の海に下りての事海草の如く也

右 後煮法師

如乃板井法師の事其の毎月之を誦す事には

左 正二位後成

又やんそく法師の撰りたる書に

右 あり法師

と一説に花乃のりに如きり云の撰りたる書に

○女歌仙

左 小野小町

此の詩は世に傳へたるものなり

右 成子内親王

わたりくさしけりて海草の如きり云の撰りたる書に

左 伊勢

二編の如きりたるものなり

右 美心

見し事ありての如くに候て花も奥ありて

左 中務

ありて事ありての如くに候て物然りて

右 内膳

候て事ありての如くに候て我下りて

○巻末











た 法少御

ふらわらるるも吹く松並波日よせあひしき御成り

た 土所門院小室お

よびてはあはれおきりしとをたあやふら御成り

た 土成二松

宿るいめおしき原御成りけりあやふら御成り

た 八条院高倉

あはれおしきあひしき御成りあやふら御成り

た 土成四松

あはれおしきあひしき御成りあやふら御成り

右 後滋淑院中御成り

あはれおしきあひしき御成りあやふら御成り

た 一兵衛侍

あはれおしきあひしき御成りあやふら御成り

右 武乾門院御成り

あはれおしきあひしき御成りあやふら御成り

た 相控

あはれおしきあひしき御成りあやふら御成り

右 藤原門院御成り

あはれおしきあひしき御成りあやふら御成り



○六根の教

眼

實際

見るは眼の力なり。見るは眼の力なり。見るは眼の力なり。

耳

基礎

聞くは耳の力なり。聞くは耳の力なり。聞くは耳の力なり。

鼻

教園

匂は鼻の力なり。匂は鼻の力なり。匂は鼻の力なり。

舌

後土御門院

味は舌の力なり。味は舌の力なり。味は舌の力なり。

身

老胤

触るは身の力なり。触るは身の力なり。触るは身の力なり。

意

教秀

知るは心の力なり。知るは心の力なり。知るは心の力なり。

七徴の教

急惠大師

此の七徴は、見る、聞く、匂、味、触、知る、思ふの七徴なり。此の七徴は、見る、聞く、匂、味、触、知る、思ふの七徴なり。



ついでそのうらもさぬらもまてあつたはたはたはた  
ついであつたはたはたはたはたはたはたはたはた  
見たりといひたるはたはたはたはたはたはたはた  
○七夕七首和歌

約七夕

後土御門院

そはあつて一軒なりとあつたやあつたを約するらん

七夕を

前内大臣はたを

そはあつてあつたはたはたはたはたはたはたはた

七夕を

明院上臈

乙川寄書らこあつて甲合らつたはたはたはたはたはた

七夕標 中院一位通秀  
おまのあつたはたはたはたはたはたはたはたはた

七夕を

海恒山大納言を

そはあつてあつたはたはたはたはたはたはたはた

七夕を

梅原使親を

清原院とそあつたはたはたはたはたはたはたはた

七夕後約

侍後中納言を

清原院とそあつたはたはたはたはたはたはたはた



鴨羽撥中

○八代集秀逸

八景和歌

南宗八景和歌

近江八景和歌

修善寺八景和歌

源氏八景

○九景和歌

○八代集秀逸 各十首依初定家撰之

古今集

小所







はあこと思われぬ物な友忠乃方あり河海に流るるは

報康

白雲に似る頃とて林野に流るるはあなまをさうりひ

七智天宮

秋の田にりぬる頃とて海に流るるはあなまをさうりひ

とんがく

秋の雨にぬる頃とて海に流るるはあなまをさうりひ

侍勢

心はあなまをさうりひ海に流るるはあなまをさうりひ

等物也

あなまをさうりひ海に流るるはあなまをさうりひ

日

あなまをさうりひ海に流るるはあなまをさうりひ

え良親也

あなまをさうりひ海に流るるはあなまをさうりひ

約平

あなまをさうりひ海に流るるはあなまをさうりひ

松丸

あなまをさうりひ海に流るるはあなまをさうりひ

○拾遺集

忠孝のこころ



長生の心は...  
真信云

心は...  
曰

己...  
心

心...  
元安親王

他...  
人丸

長...  
右近

心...  
徳徳云

心...  
真信云

心...  
心信

心...  
○ 後拾遺  
紫莖了







山嶽嘆う若引り冬々の雪井よさむの海乃志し系  
基俊

友乃新八月の月あてとこい若なる清らけいし  
経伝

冬これ山田乃の善伝て若外、秋登よ秋風うき  
龜島

何らら忠海がよ子も乃たし秋毎いふ秋なるの徳孔園と  
乃師

冬こそ秋のゆき今いふれふけの雪かおらひ  
俊頼

あし草葉末あむじとよ白雲の風を海へとてよきあまむ

紀伊

若母さうとあし秋のわ浪のけしと秋乃遊も此れ

和泉或

徳とこし若る下と秋もいふ埋れぬ秋を伝て秋

約号

徳と色も何れれとあし秋むよりけり志家今

小或乃内物

大いふいふれ乃と秋もいふとあし秋の徳

○詞花集

匡房



白雲とてあつたるやうに言はれり此の心はさうりか

伊勢土浦

あつたるやうに言はれり此の心はさうりか

長能

あつたるやうに言はれり此の心はさうりか

実方

あつたるやうに言はれり此の心はさうりか

景徳院

あつたるやうに言はれり此の心はさうりか

重之

あつたるやうに言はれり此の心はさうりか

徳宣

あつたるやうに言はれり此の心はさうりか

清和納言

あつたるやうに言はれり此の心はさうりか

法性寺入道園白

あつたるやうに言はれり此の心はさうりか

石洲

あつたるやうに言はれり此の心はさうりか

子載集

清輔の片











清湘水雨

舟人浪浪

波声小如春

雨之洒洒

去之如秋

一雨



洞庭秋月

秋水共长天一色

落霞与孤鹜齐飞

秋水共长天一色

落霞与孤鹜齐飞

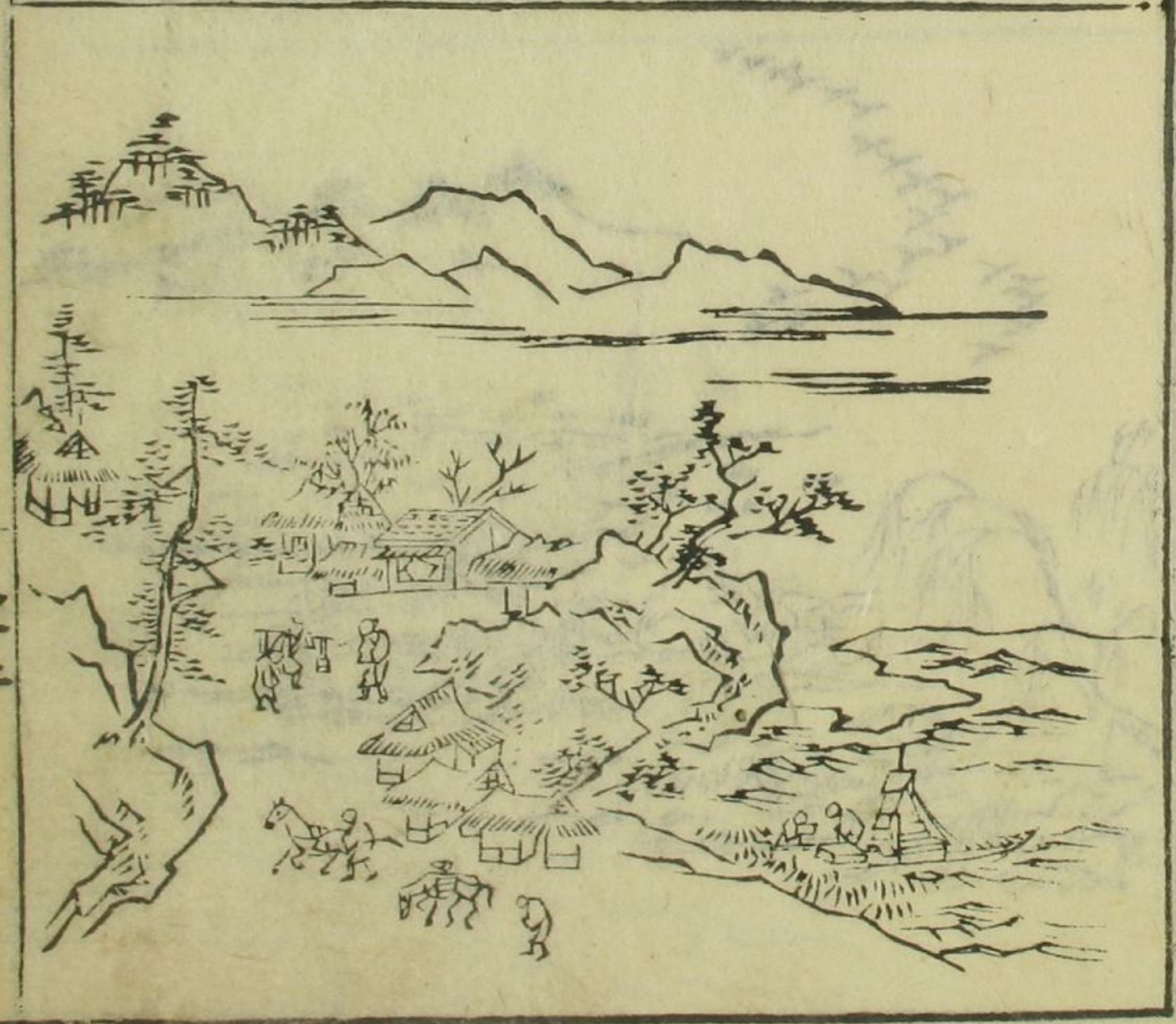
秋水共长天一色

落霞与孤鹜齐飞

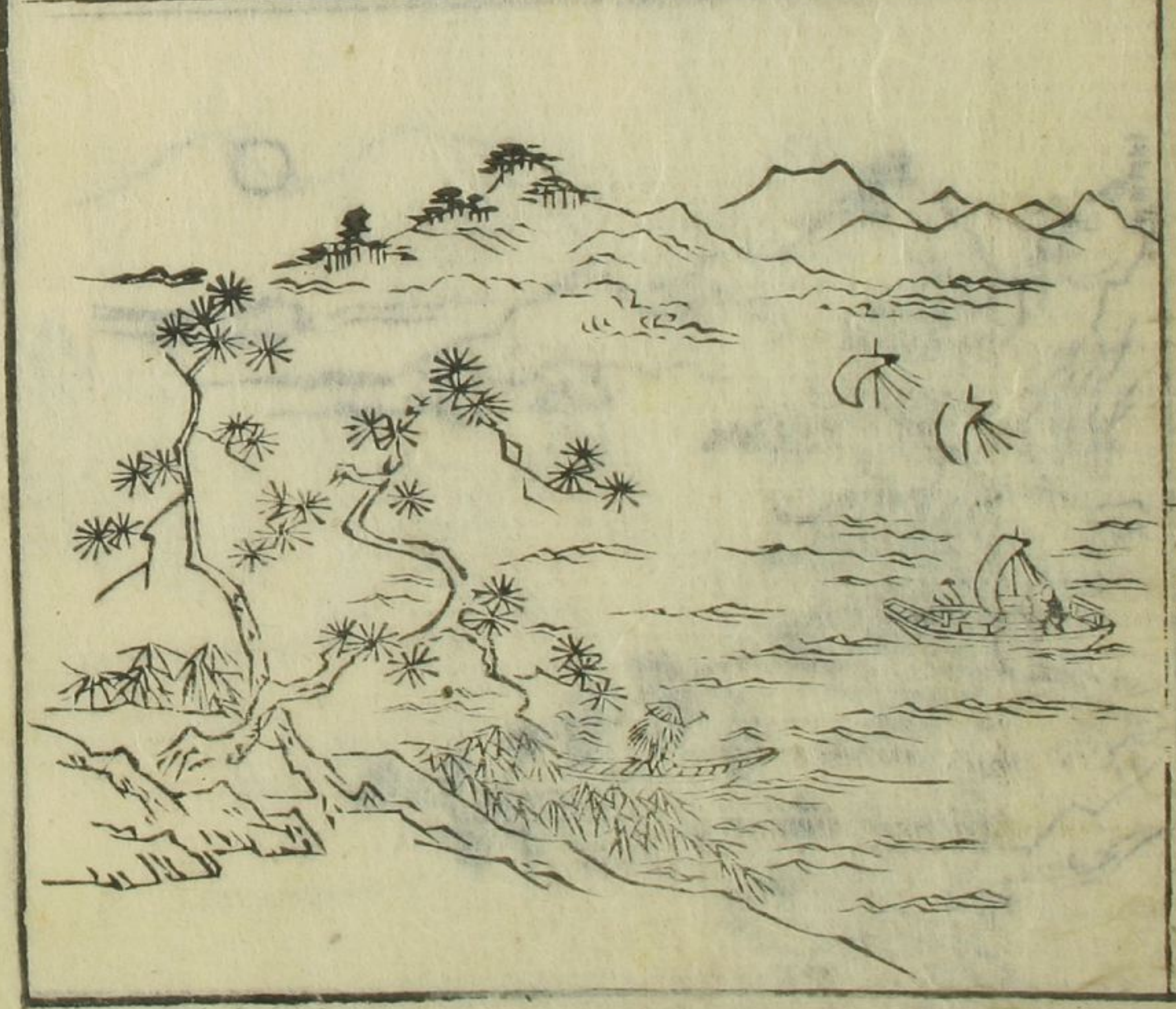




山市晴嵐  
 雲をくじり  
 上は空  
 舟は志つ  
 舟は志つ



遠浦晴帆  
 舟は志つ  
 舟は志つ  
 舟は志つ  
 舟は志つ













○八景和歌

壺浦帰帆

所製

反小松院

一葉をまよひもて壺浦風をよそひくか秋津のつり舟

洞庭秋月

水清氷湛乃のほこわきくかぬえく想ふとあち月乃けふ

年砂磨石

湊田もよわ居るなる秋をねほりてあまのこらにまよわ

の天書言

雲乃きのひ川よりぬきかゝる舟も言えぬ言はせ

滿湘秋雨

あとのみしなる舟は雲をけしてぬもきくかあまのこら

山市晴嵐

わよの尾上は松を言きくありとけりてとて言

奥村夕照

夕照白くはる梅乃入浪をいへる舟は心もあまのこら

遠く晚鐘

嵐よりおのらりきりき梅をよ梅のよい舟のこら

○八景和歌

遠浦帰帆 的魏化

秋風乃想とるわ舟もよそひくか秋津のつり舟



洞庭秋月

とて女海のついでに女海にうたふ女海にうたふ女海にうたふ

手沙為房

あつらふも海にうたふ女海にうたふ女海にうたふ女海にうたふ

江天書雲

書に海にうたふ女海にうたふ女海にうたふ女海にうたふ

瀟湘秋雨

長行と海にうたふ女海にうたふ女海にうたふ女海にうたふ

心市晴嵐

うたふ女海にうたふ女海にうたふ女海にうたふ

漁村夕照

河の底にうたふ女海にうたふ女海にうたふ女海にうたふ

遠寺暎鐘

今そら紀中を八重にうたふ女海にうたふ女海にうたふ

○八景和歌

遠浦海帆

非世他

雲の心裏にうたふ女海にうたふ女海にうたふ女海にうたふ

洞庭秋月

あつらふも海にうたふ女海にうたふ女海にうたふ女海にうたふ

手沙為房



白の乃まほしき花のゆるりたるをよみてみれば

白の書雪

風をよみてみれば雪の白くはるかにみえり

蒲湘夜雨

神ぬくはるかにみれば雨のゆるりたるをよみて

ふ市書雪

花をよみてみれば雪の白くはるかにみえり

漁村夕照

言ふとれき夕のけもきをぬくはるかにみえり

遠の書雪

色あききふり行くみづをたりにてをのよみてみれば

○八景和歌

遠浦帰帆 秋の他

わづかのあふることよ浪のゆるりたるをよみて

洞庭秋月

とむる庭の庭を尾ともぬきそね月をよみてみれば

東沙書雪

ひまよじりな浪のゆるりたるをよみてみれば

白の書雪

花の乃まほしき花のゆるりたるをよみてみれば



蒲湘秋雨

舟とび入るの暮れはあつた暮れかきつゝあつたあつたのさうか  
山市晴嵐

春うえ乃ひよとぬよび引くわぬわぬよさうく市人  
漁村夕照

のさうあつた夕乃浪舟舟けしてあつたあつたあつたあつた  
遠方喫煙

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
○八景和歌

遠浦扁帆 実澄化

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
何夜杖月

月け乃あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
東波落序

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
山市晴嵐

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
蒲湘秋雨

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
山市晴嵐



山は乃そいよまらせく長杖の錦の行む市介の

漁村夕照

海去乃流じくく丸く若女景の白すく肌よまきりぬく

遠方晚鐘

かむわひぬ尾と乃のねのたきりの志をわもぬぬしほ

○南京八景

南唐老殿

左波右石 二景良基云

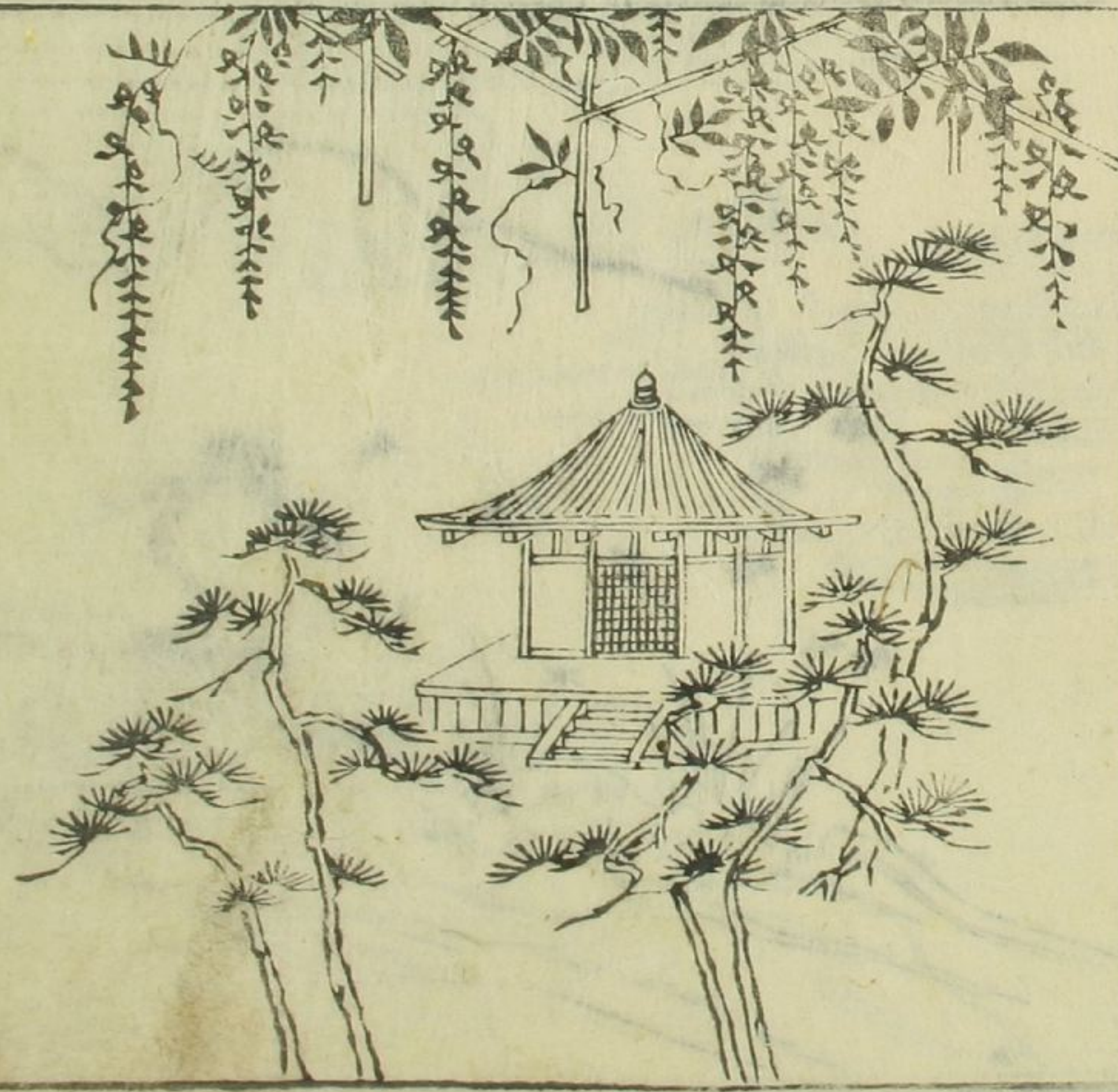
夜半月と神光

六とよあむたれ

八子世伝ふけ

寺後ろ

山之人





佐深川

東山堂之集卷之二

長江流

浩浩乎

浩浩乎

浩浩乎

浩浩乎

浩浩乎



横澤池月

九之清澄如初夜

非華野

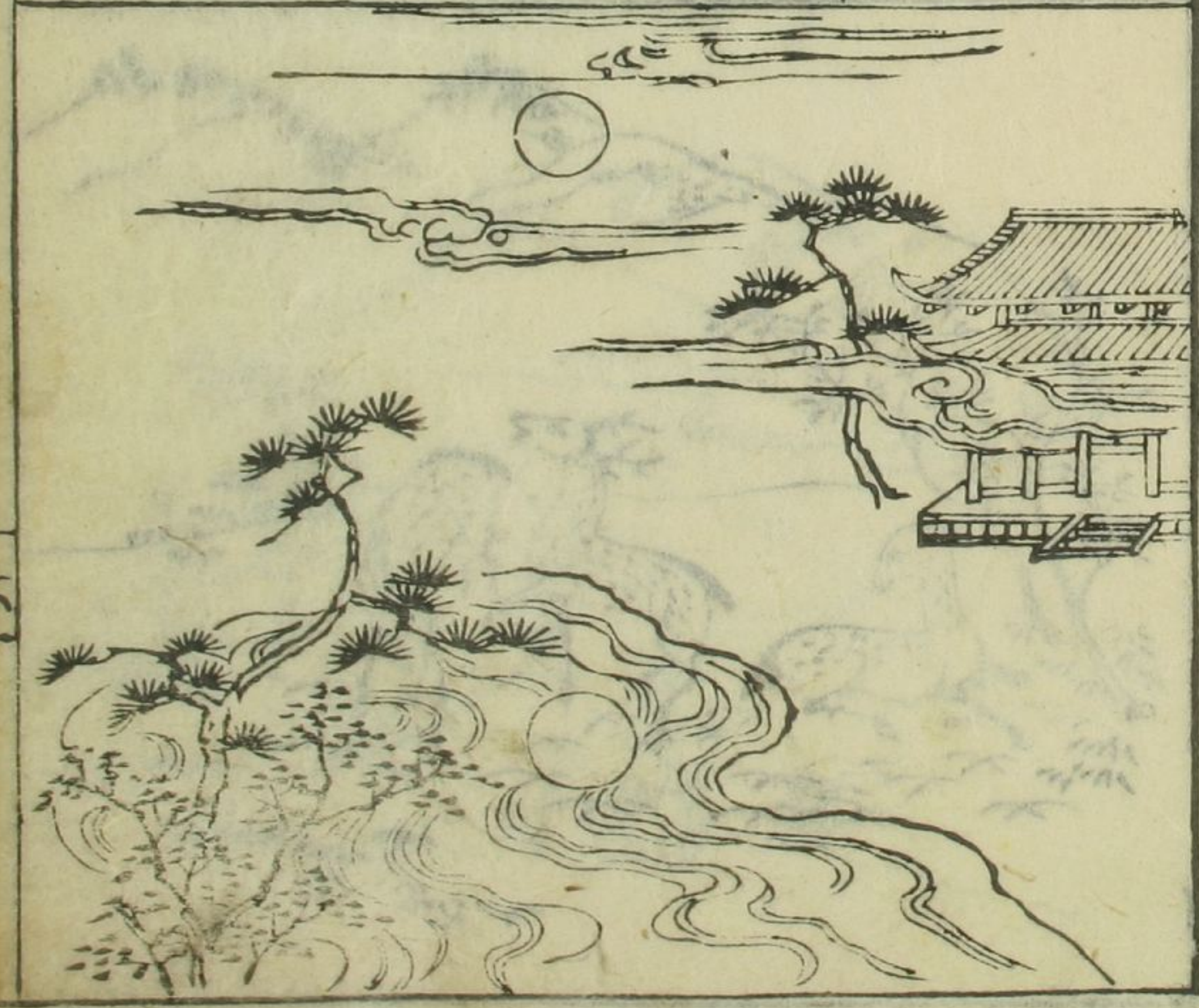
長原高波

水多之流

月

月

月





白雲の 東の山  
 光る 神や  
 名も あり  
 赤松の 実後云  
 三途の 電



去日所麻 信中酒の徳  
 山乃 あり  
 あり あり  
 さびし あり









夷傳の女

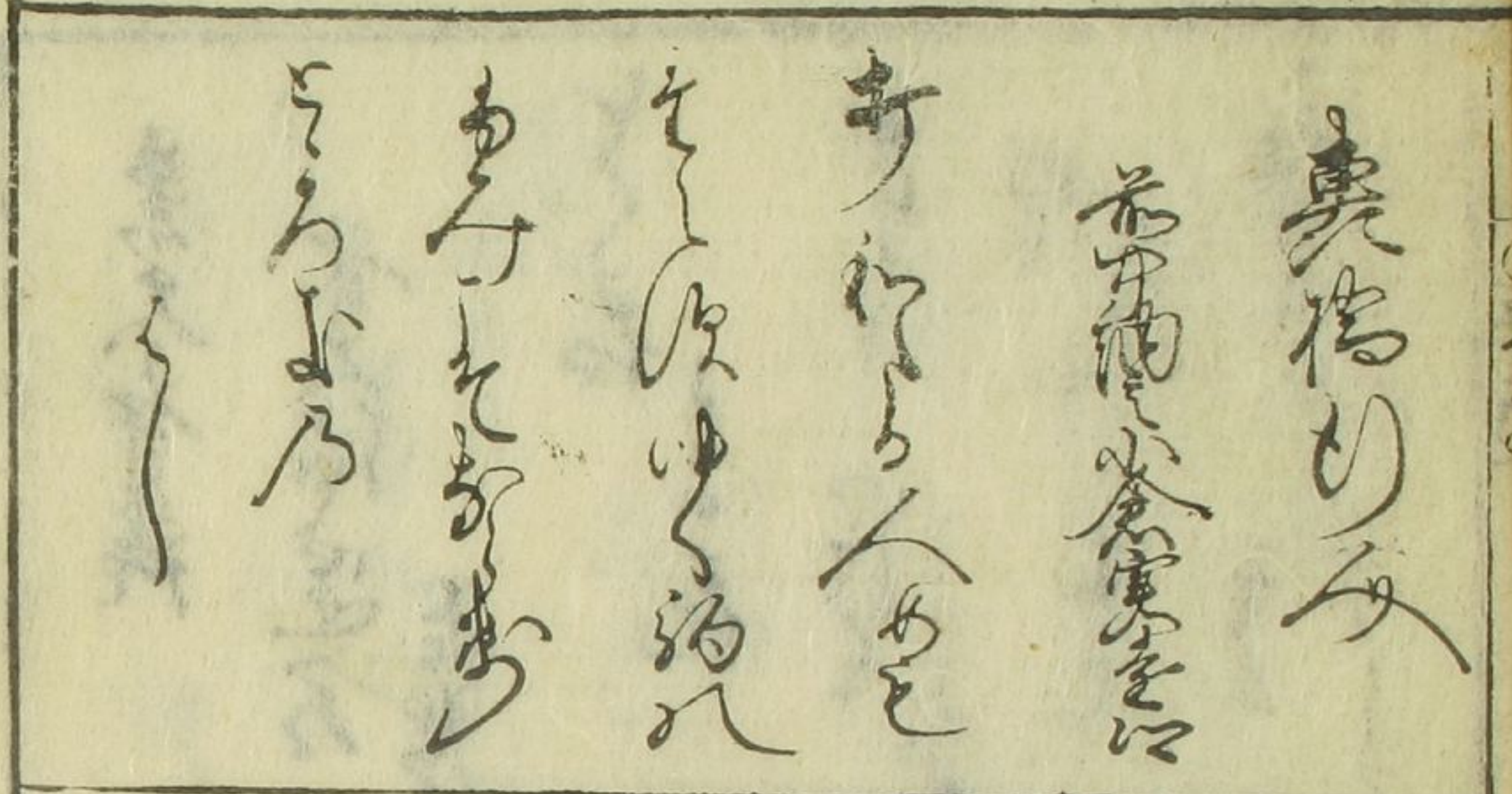
若中酒の巻末を以

舟のり人か

とて浪のつゆに

あふれを新あ

らるよ乃



○近江八景

粟津晴嵐

園白時嗣云

今藤之親院信尹云

更のぬ河一上

流れ舟を舟に

舟のぬ波乃河に

舟のぬ波





三井 晚  
 清 遠  
 三 井  
 乃 乃  
 の ね  
 久 久  
 う 久



豊田 夕照  
 夕 日  
 夕 日  
 夕 日  
 夕 日  
 夕 日





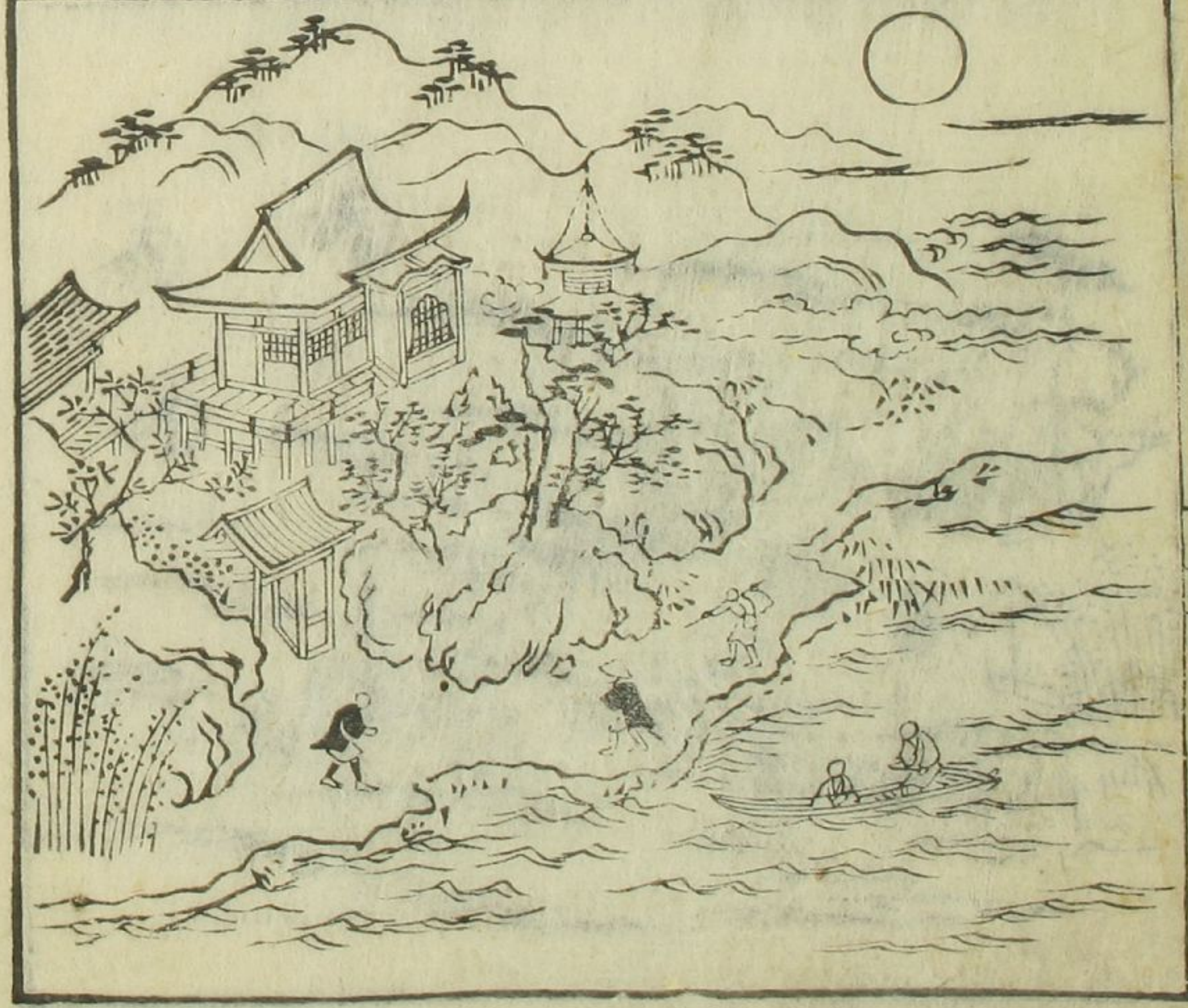




豊田彦彦  
 ね ね ね ね ね  
 ね ね ね ね ね  
 ね ね ね ね ね



石山杖月  
 月ヶけ冬  
 海てり  
 あふ乃  
 石山  
 石山  
 石山





夕暮の  
 花乃  
 由波  
 比良雲



〇修学寺八景  
 村路晴鳥  
 智忠親王八景  
 夕風吹波一帯也  
 心水新電より  
 夕見日一尺  
 里人





終年 唯 終

竟州親王御法院

あふを終

志

身丸

群よ

入相乃終もよ終日

うかり



遠祖 瑞 撫

あつし

ふゆ

と

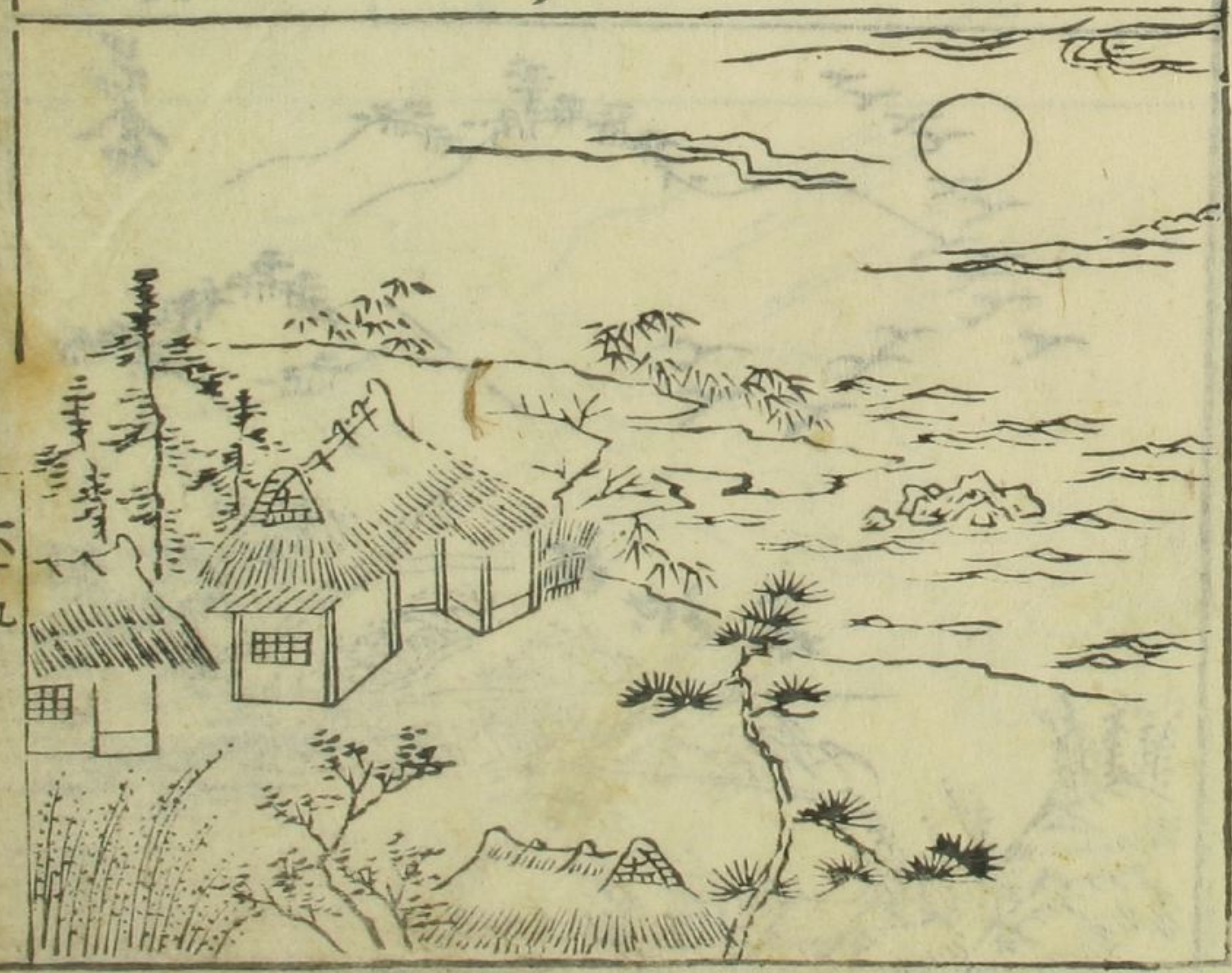
ふゆ

乃 是 親 王

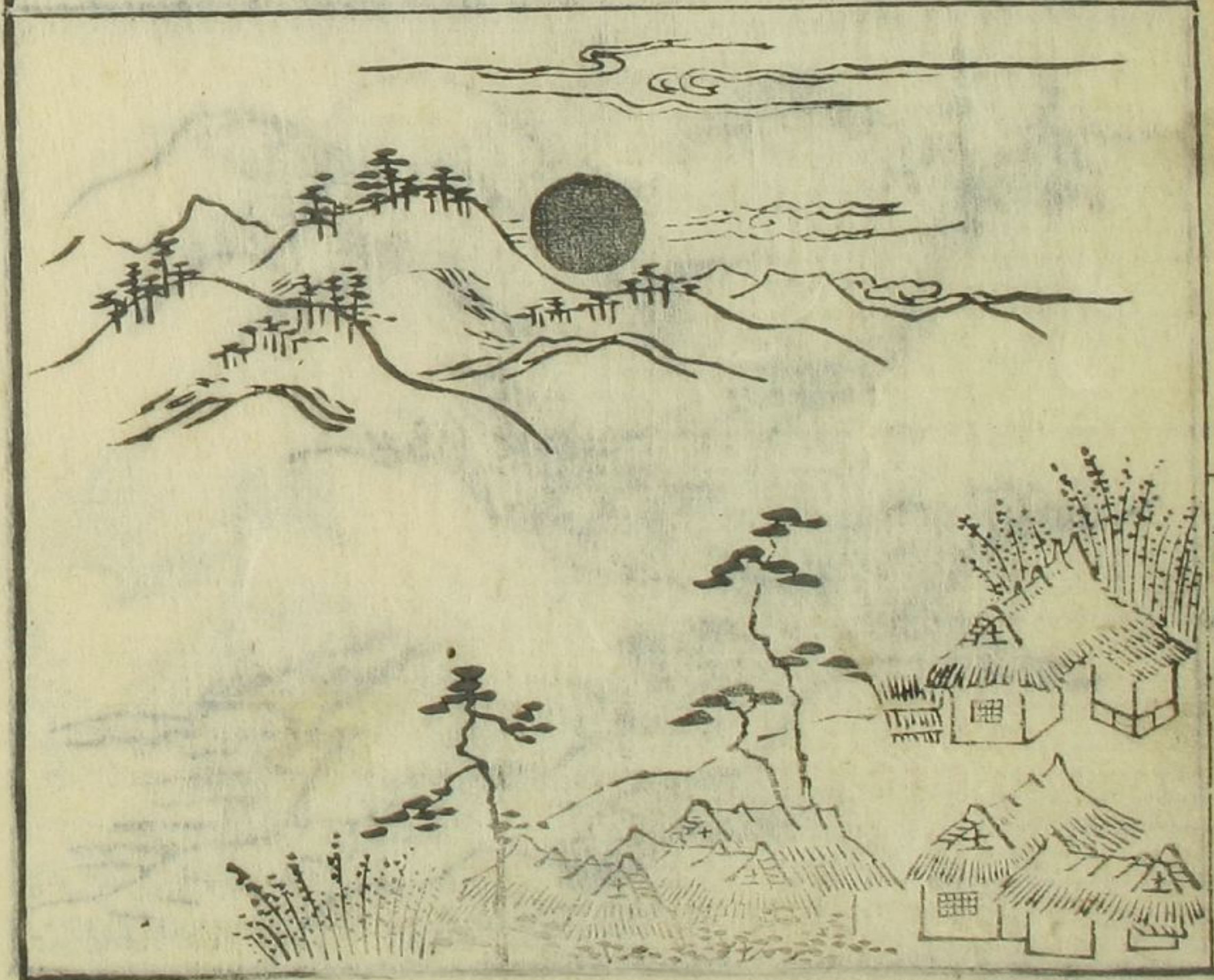




茅捲杖月  
 寛き心 鳥丸  
 大納言  
 心  
 月  
 心  
 心



松海夕照  
 龍章の 龍馬井  
 大納言  
 新  
 夕日乃 雲の 見  
 法成 出  
 同 所 是 乃 耶





平田落馬 具記

心置冬秋

身少心多

瑞雲の跡

流るる水

つらき心

鳥倉



隣重和雨

通茂江中流

とる

張

名

み

あ

江

無

新

子













かゝるきりうかりくはとまひのちみまきりうか  
かゝるきりうかりくはとまひのちみまきりうか  
かゝるきりうかりくはとまひのちみまきりうか  
かゝるきりうかりくはとまひのちみまきりうか

○ ぬき ぬき

海乃はついでにきりうかりくはとまひのちみまきりうか  
かゝるきりうかりくはとまひのちみまきりうか  
かゝるきりうかりくはとまひのちみまきりうか  
かゝるきりうかりくはとまひのちみまきりうか  
かゝるきりうかりくはとまひのちみまきりうか  
かゝるきりうかりくはとまひのちみまきりうか  
かゝるきりうかりくはとまひのちみまきりうか  
かゝるきりうかりくはとまひのちみまきりうか

乃とま海をたぬきすしとま海をたぬきすし  
乃とま海をたぬきすしとま海をたぬきすし  
乃とま海をたぬきすしとま海をたぬきすし  
乃とま海をたぬきすしとま海をたぬきすし

○ 松舟 帰帆

舟乃の舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟乃の舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟乃の舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟乃の舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟乃の舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟















ちれまはるまをうとれと経乃教人守りて念  
仏がよの教をうりして人乃げらひいとてくさく  
あう〜れ候うひらうま康のま〜難乃ま〜に  
そ〜すみは〜心田乃ひ〜あをせらうら〜候ら〜に  
いね〜も乃中ひ〜ま〜て〜ら〜候〜い〜ま〜候〜に  
かり〜跨の教乃い〜と〜おせら〜んとせら〜ら〜と  
ま〜り〜う〜候〜い〜ら〜と〜く〜ら〜い〜ひ〜く〜ま〜び〜ら〜乃法  
の〜と〜こ〜ら〜候〜法乃ま〜げ〜ま〜が〜ら〜よ〜ら〜あ〜ら〜く〜れ〜ら〜ま  
乃下〜より〜人〜を〜う〜れ〜候〜ひ〜ら〜りの〜も〜を〜あ〜ら〜ら〜ら〜ひ  
い〜ゆ〜い〜あ〜せ〜ら〜う〜も〜の〜れ〜と〜み〜お〜ま〜の〜れ〜候〜ら〜れ〜と

まがれ乃ゆらう〜候〜う〜ま〜や〜ら〜ま〜い〜と〜ま〜い〜ら〜ら〜候〜後乃  
お〜れ〜ら〜ら〜の〜世乃書乃の〜も〜と〜に〜ま〜り  
あ〜て〜奉〜う〜と〜あ〜ら〜い〜ら〜て〜ま〜ら〜ま〜り〜あ〜ら〜い  
よ〜れ〜の〜が〜ど〜〜ま〜ま〜と〜ま〜や〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら  
あ〜ら〜と〜せ〜う〜〜い〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら  
さ〜す〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら  
ま〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら  
ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら  
ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら

○九お之和歌

云何撰



とぞい

あはれなる心なる浦の釣書に書かぬの年がとせりふ  
去るにあらうとやと昔舟のしよもあつとと釣かたあらん

とぞ中

とぞあはれなる心なる浦の釣書に書かぬの年がとせりふ  
あはれなる心なる浦の釣書に書かぬの年がとせりふ

とぞ下

せの中はせしと梅のあはれなる心なる浦の釣書に書かぬの年がとせりふ  
とら月乃釣の書に書かぬの年がとせりふ

中とぞ上

とら月乃釣の書に書かぬの年がとせりふ  
とら月乃釣の書に書かぬの年がとせりふ

中とぞ中

とら月乃釣の書に書かぬの年がとせりふ  
とら月乃釣の書に書かぬの年がとせりふ

中とぞ下

とら月乃釣の書に書かぬの年がとせりふ  
とら月乃釣の書に書かぬの年がとせりふ

中とぞ上

とら月乃釣の書に書かぬの年がとせりふ  
とら月乃釣の書に書かぬの年がとせりふ

とら月乃釣

とら月乃釣







長江新

おのれをわたり

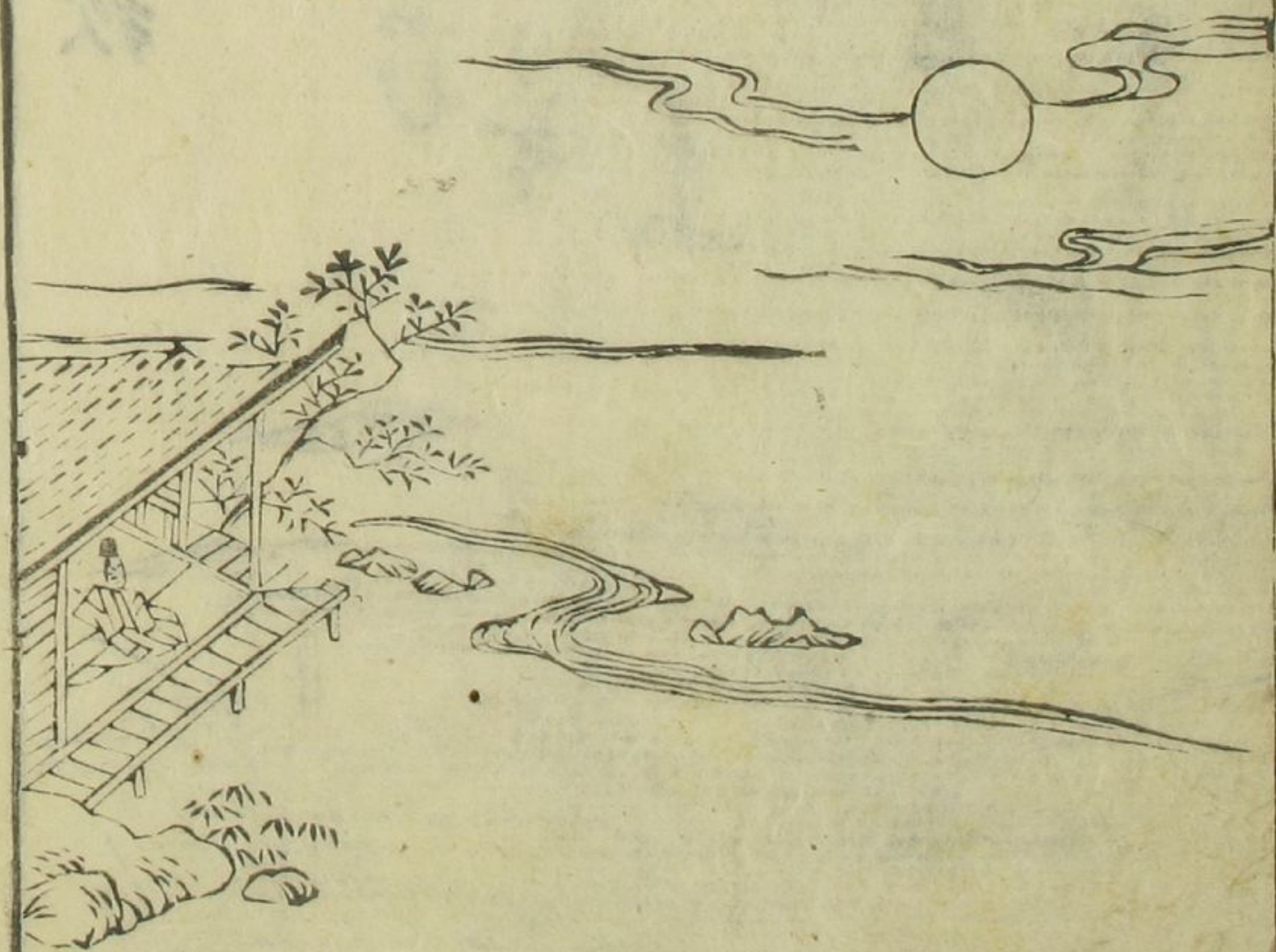
いふに

おのれを

わたりはる

月夜

おのれを



有の卦

大新河流へ

乃松をきり

ありもふふ

幸のこや

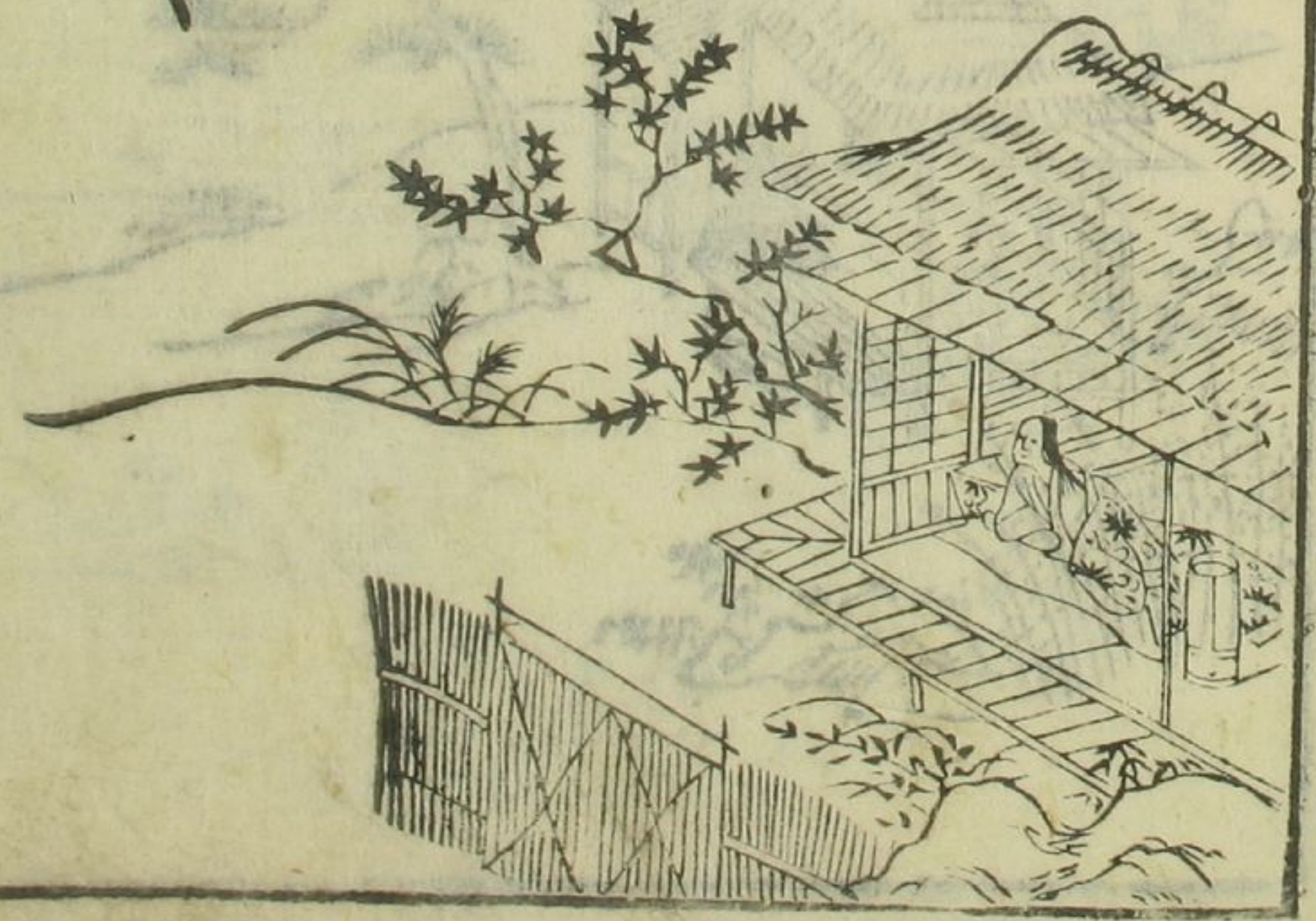
とふは





大いなる  
すなはち

長  
水  
之  
長  
舟  
は  
是  
れ  
也  
舟  
は  
是  
れ  
也  
舟  
は  
是  
れ  
也



深  
鉢

舟  
と  
海  
の  
舟  
は  
是  
れ  
也  
舟  
は  
是  
れ  
也  
舟  
は  
是  
れ  
也









見様神

旁

きり

あ

のり

きり

秋

心

夕雲

松乃



首一節神

きり

きり

波

きり

心

きり

松乃

きり





鬼拉鉢

ぬれく保原

わくしん

紫木

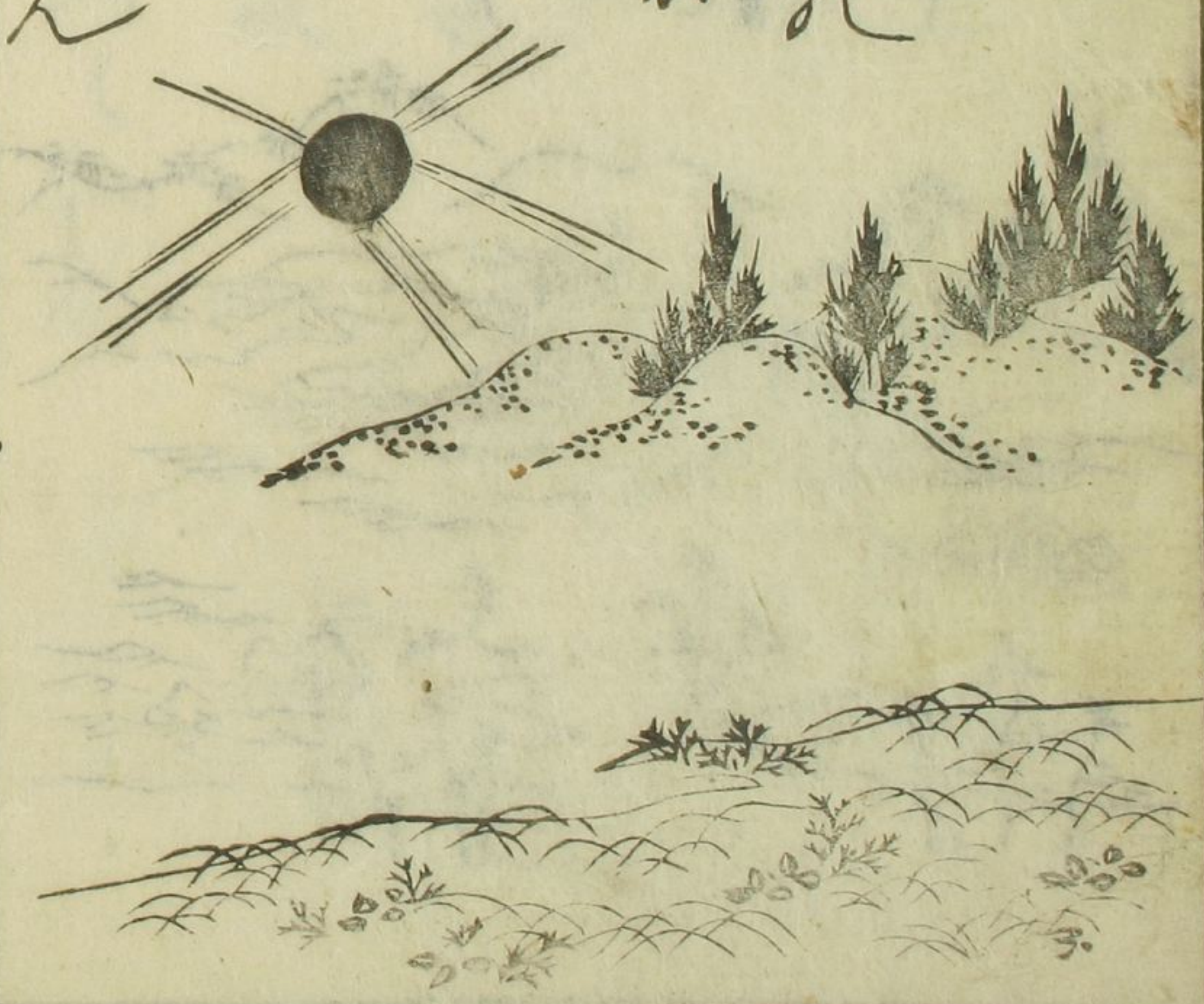
あ

霧り

も照ひり

いそ

魚ぬん



○十鉢和歌

才一幽玄神

あひ河をよみあふ海の水をよみあふ海の水をよみあふ  
有明のよみあふ海の水をよみあふ海の水をよみあふ

才二長言神

あひ河をよみあふ海の水をよみあふ海の水をよみあふ  
有明のよみあふ海の水をよみあふ海の水をよみあふ

才三有明神

あひ河をよみあふ海の水をよみあふ海の水をよみあふ  
有明のよみあふ海の水をよみあふ海の水をよみあふ



才白藤躰

あつて今く我意を松乃木に託すは心ゆくも  
あつてねえとてあつてあつて川に流るるも  
あつてねえとてあつてあつて

才又事可流神

あつてねえとてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

才六回白神

あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

才七流神

あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

才八見様躰

あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

才九有一節躰

あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

才十鬼拉神

あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて







佛界

今かりし世の如く晴つてとて今をかくとある月日  
○十如是如教

如光相

後去所門陀

中流より舟をぬくは世にあらむとて舟をたてしる

如光性

前日大元在帝

舟のこゝろをたてしるは世にあらむとて舟をたてしる

如光輝

洞流上腐

松舟かき舟をたてしるは世にあらむとて舟をたてしる

如光力

中院一恒通秀

舟をたてしるは世にあらむとて舟をたてしる

如光作

海住山火納を言清

舟をたてしるは世にあらむとて舟をたてしる

如光周

梅家使親長

舟をたてしるは世にあらむとて舟をたてしる

如光縁

舟後中流に實際

舟をたてしるは世にあらむとて舟をたてしる

如光果

舟後中流に實際

舟をたてしるは世にあらむとて舟をたてしる

如光報

舟後中流に實際



はのたれそめぬとてあまをてふまはくし方とてまふひはね  
 かし本末究竟も古邊  
 こぬまふとくともいふ世もあはる花のたれとてはく人

○詠花鳥倭秋 各十二首

春淺藤原定家

後仁智宮月次の花鳥の秋始は  
 明の秋魚兒とのあはるはあはるさあはる  
 のまはにありとていふ今もあはるもあはる  
 魚兒とてあはるはあはる

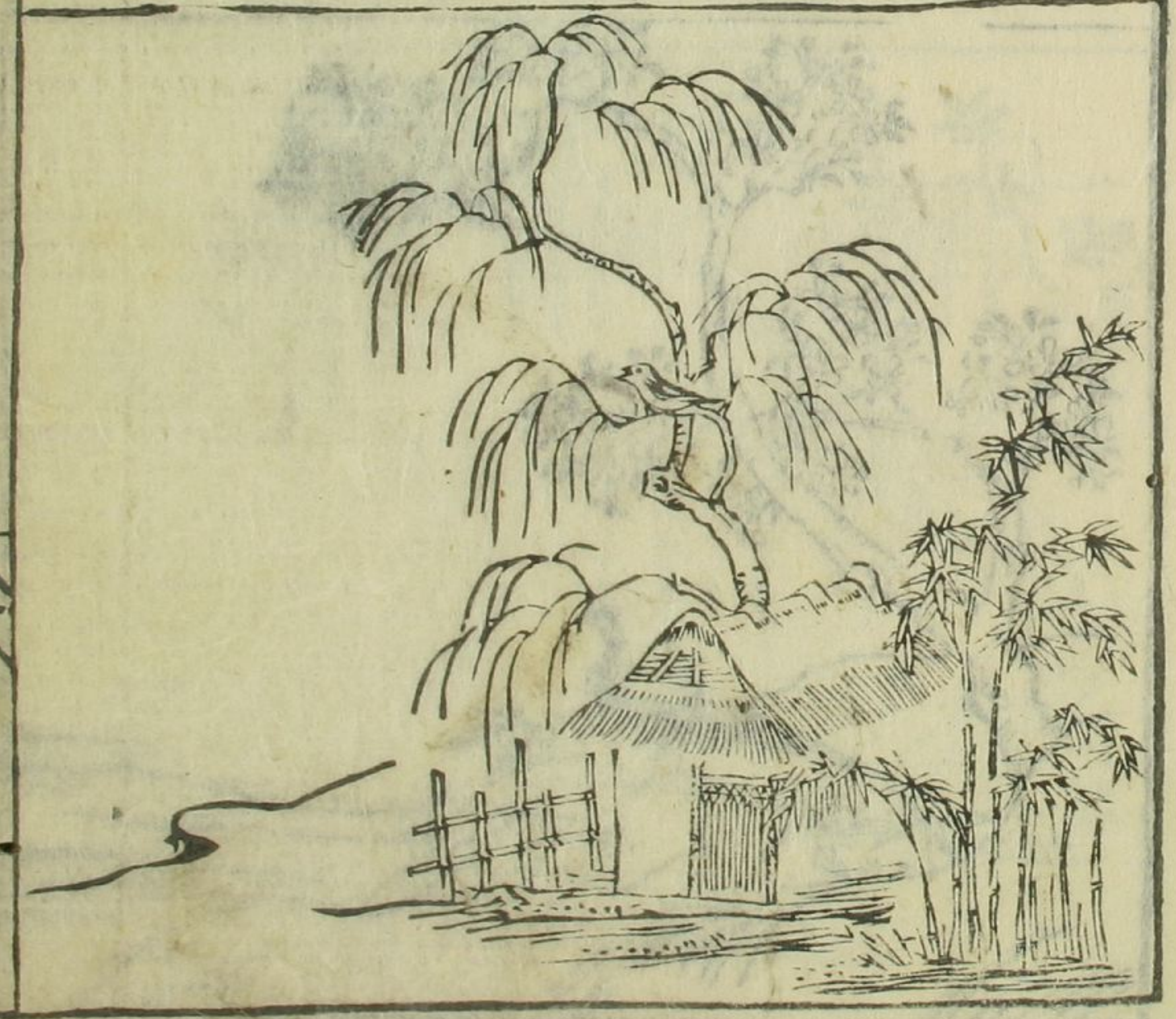
正月 柳

あかひよ

あまの  
あまの  
あまの

あまの

春あまのあまのあまの  
 とあまのあまのあまの  
 うまのあまのあまの  
 あまのあまのあまの





二月 蝶

物女乃辰小女

と家妻の月と雲

と小ましつらよ

そらん

人れ 被せし

夕

花

二月 さく



二月 友

り妻はるこ

とやこくあつむ

そ致すの故のあ

ゆり

重雀

とれ咲ひらるる

麻小あつらふ

おんあつらふ

常次妻うた













九月とよ  
 花とよ草の秋の  
 房亦はとよ  
 當り  
 秋乃運風  
 語  
 夕めさの  
 ねぬや  
 う  
 大さん  
 霜よ



八月 康時草  
 秋をけぬ  
 多と  
 初月  
 秋乃運風  
 秋乃運風  
 秋乃運風  
 秋乃運風  
 秋乃運風





十月 枇杷  
 枝の 葉の  
 花を 冬乃月  
 ま 春草の  
 つま 霜の  
 子鳥  
 高き 松の  
 山 ありの  
 河津の 水  
 ひのき



十月 菊  
 花の 霜の  
 ま 秋の  
 つま 夕日  
 子鳥  
 高き 山  
 河津の 水  
 ひのき

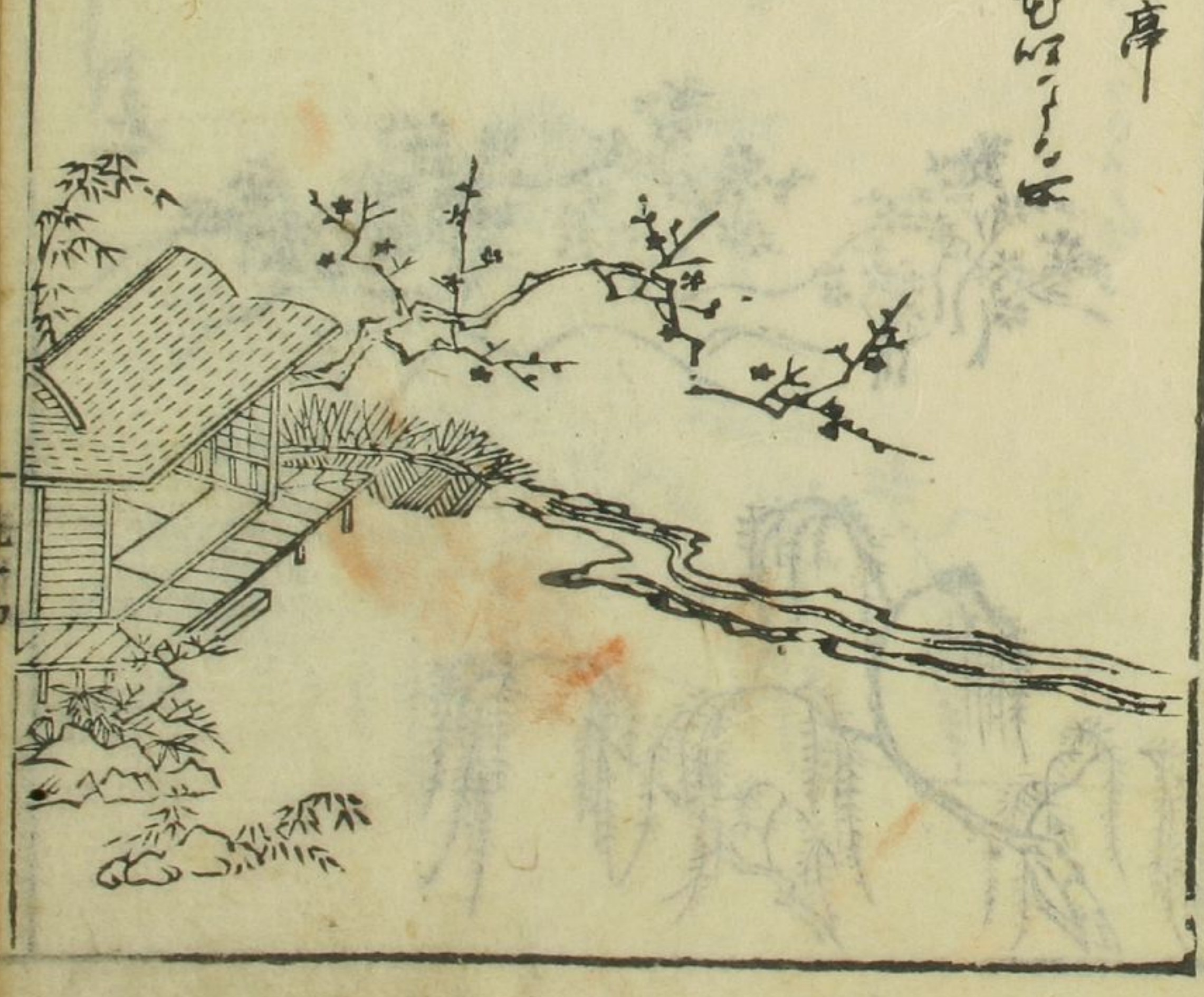




十二月 山遊作序  
 正月 人の家よ梅のこころ  
 梅 花 枝 影  
 雪 色 白 如 玉  
 水鳥 池 乃 妙  
 木 石 電 流 の 影  
 空 一 色 白  
 花 枝 影 池 乃 妙



十二月 山遊作序  
 正月 人の家よ梅のこころ  
 梅 花 枝 影  
 雪 色 白 如 玉  
 水鳥 池 乃 妙  
 木 石 電 流 の 影  
 空 一 色 白  
 花 枝 影 池 乃 妙



十二月 山遊作序



二月柳の極北の山に記す

冬後新永 元吉 庶流

山柳と云

ひらね

精名次

花乃柳

くわん くわん



三月 松の葉はくらくら

と中柄は

松の葉はくらくら

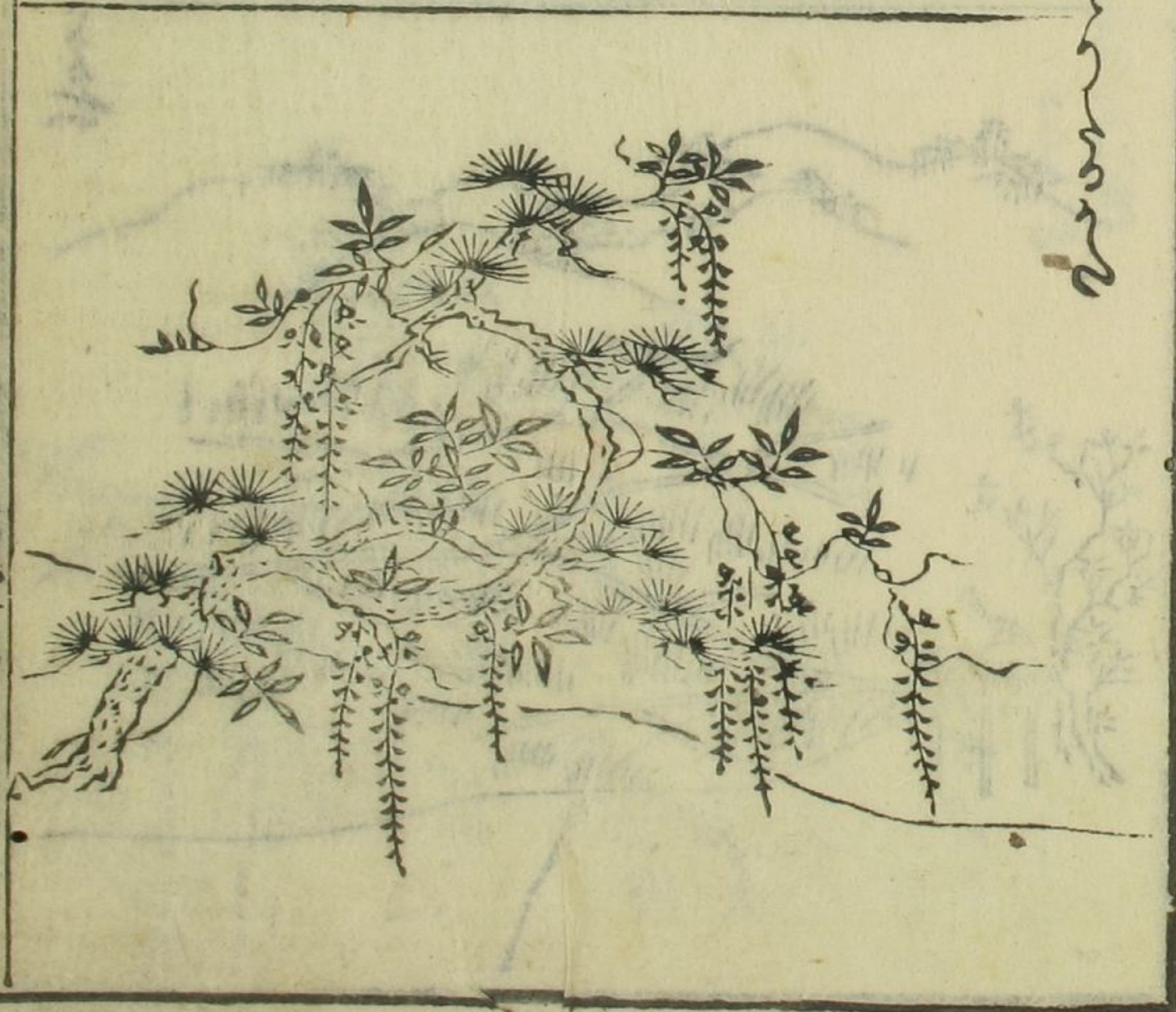
松の葉はくらくら

松の葉はくらくら

松の葉はくらくら

松の葉はくらくら

松の葉はくらくら





九月廿五日

九月廿五日

四月 早苗之ころ

九中 稻歌 記并  
注天字歌

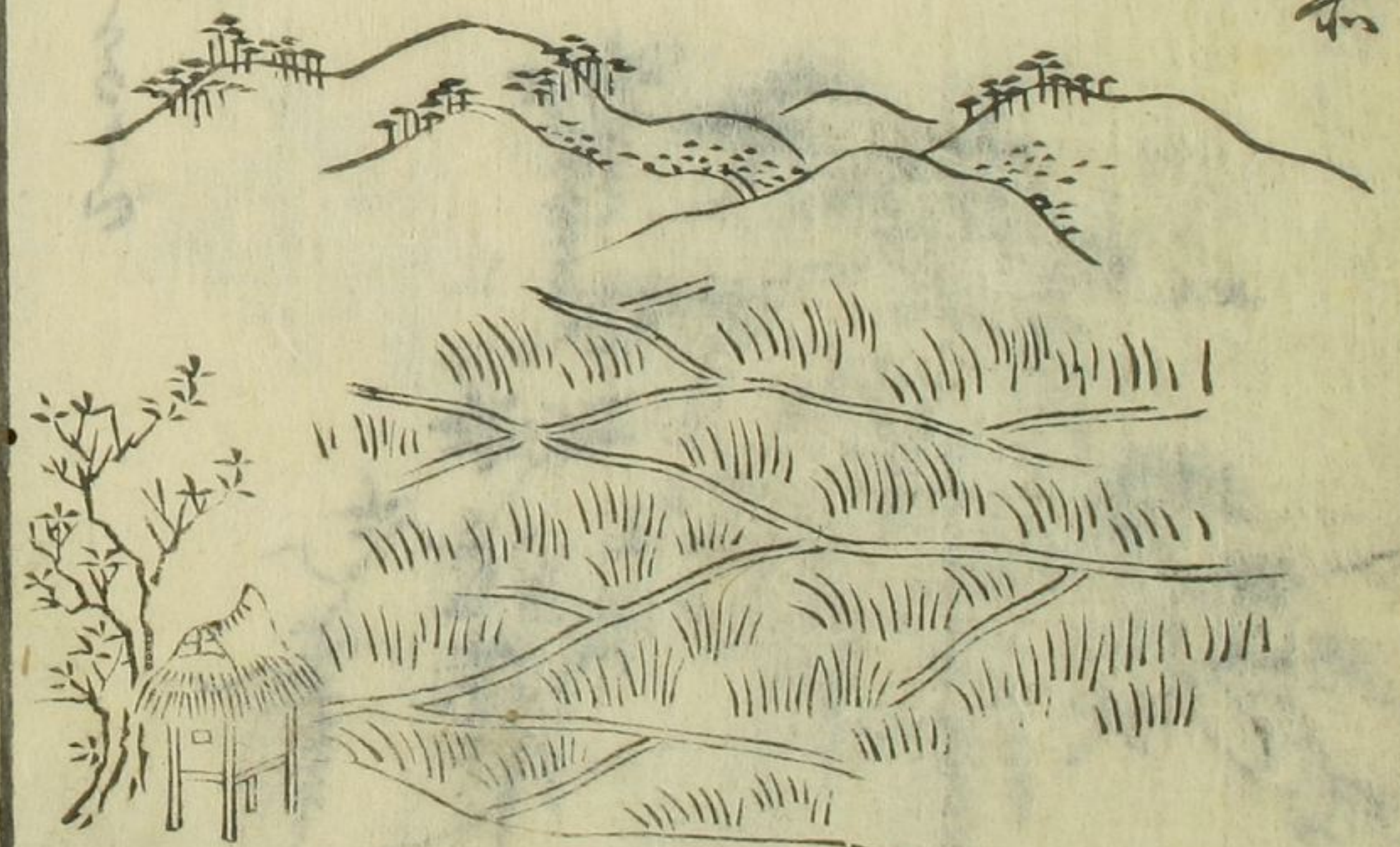
うし 初み ぬき

子 苗 ころ

喜 ね ね ね

あ げ げ

き



九月 早苗のころ

早苗歌

あ げ げ

うし 初み ぬき

あ げ げ

あ げ げ

あ げ げ

あ げ げ





六月廿一日 夕暮る

たふさふさ

ひさひさ

せ乃おれ

とさけのこ

あしこの記



七月

桐の葉まらり

釋正徹

比

木

ふ

あ

うらな

桐

葉

ま

ら

り





八月 萩の味をいふるに似たり

檀弓 檀都 堯孝

萩

めあ

書

風尔

と色あふ

萩と免て

萩と

いじ秋の



九月 萩の味をいふるに似たり

河津 常閑 今川

石三 恒氏 実

萩

萩

萩

萩

萩









十二月 雪の田上梅咲ふらふ

秋正脱

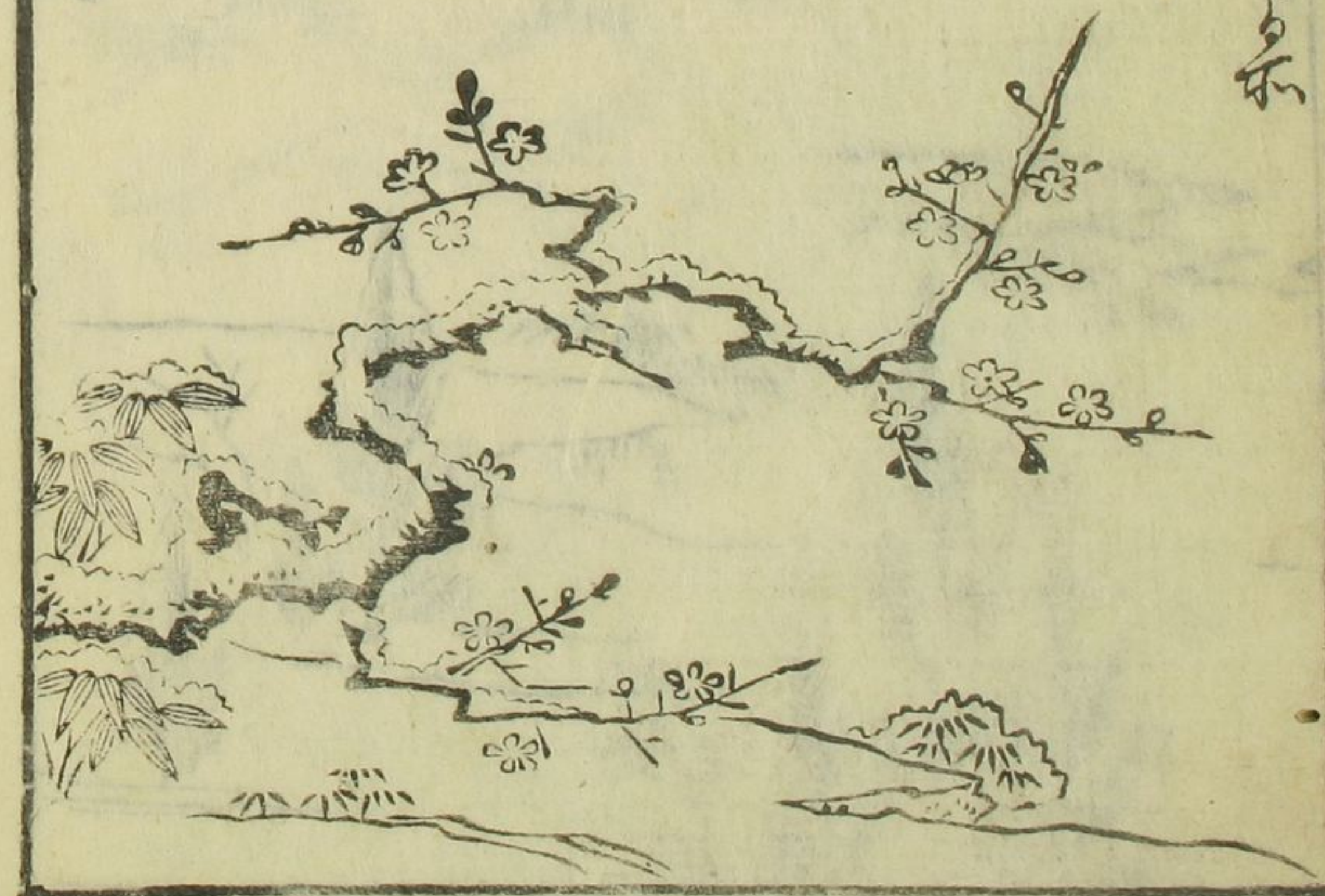
春らしも中はき

乃雪の

花うら冬

さうりに

梅ひくくあり



○女一代集巻既巻を辨致

古今集 女巻 五原先方

古今集 女巻 五原先方 女巻 五原先方

五原先方

子孫後代乃社此非小松 後代乃社此非小松

後代乃社此非小松

あり書乃月乃月長らふつ あり書乃月乃月長らふつ

あり書乃月乃月長らふつ

あるまはしき あり書乃月乃月長らふつ

拾遺集 女巻 五原先方











梅非の...の...  
お中納言通仲

玉葉集 女巻 紀書

...の...  
お大納言通仲

淡心載集 女巻 前中納言通仲

...の...  
お中納言通仲

...の...  
お大納言通仲

續好捨遺集 女巻 前大納言通仲

...の...  
お大納言通仲

田井集 女巻 お大納言通仲

...の...  
お大納言通仲

新子載集 女巻 官太右衛門通仲



喜也... 大納言... 後光

い... 中納言... 後光

の... 中納言... 雄

大井... 新格遺集... 大納言

し... 儀同... 二月

あ... 新格遺集... 大納言

表... 大納言... 後光

あ... 大納言... 後光

○... 大納言... 後光

あ... 大納言... 後光

あ... 大納言... 後光



悉是君子確言

貞潔

女の心は如くもまよふべからず一人の心を清く守らね

清心正解

好仁

自ら先づ心を正し世より清くも人を知る中

心世善業善

忠榮

を先ず求むれば世乃れ存ありて月を介し日月を以て

心尚徳愛權

良恕

を以て徳を以て清く正し世より清くも人を知る中

信化信化

善性

徳人の徳を以て清く正し世より清くも人を知る中

心秘善善行

克純

心を以て善く正し世より清くも人を知る中

我既既満

良純

徳を以て清く正し世より清くも人を知る中

法華最才

乃見

と見よばしよと志す中より其の心清く正し世より清くも人を知る中

在七寶塔

善性

志す心清く正し世より清くも人を知る中

終女成佛

實際

と清く正し世より清くも人を知る中



我不愛身命 勸持不 資勝

上をなれば法乃た所 一人のあはれを命に何うと 上人

常宿是好夢 無常不 光廣

そくそんは法乃た所 一人のあはれを命に何うと 上人

戒常持法 必海出 總光

そくそんは法乃た所 一人のあはれを命に何うと 上人

常五聖徳 必海出 孝繼

そくそんは法乃た所 一人のあはれを命に何うと 上人

不久宿道 湯多 實取

そくそんは法乃た所 一人のあはれを命に何うと 上人

如是展轉 教法 必海出 光慶

そくそんは法乃た所 一人のあはれを命に何うと 上人

唯揚自明 法 必海出 通村

そくそんは法乃た所 一人のあはれを命に何うと 上人

我深敬汝 若 必海出 眞實

そくそんは法乃た所 一人のあはれを命に何うと 上人

即已乃揚 法 必海出 業光

そくそんは法乃た所 一人のあはれを命に何うと 上人

各還本去 囑累 必海出 成

そくそんは法乃た所 一人のあはれを命に何うと 上人







阿多一都人... 娘と云ふ... 其の意

五月雨

雅經

勢乃尾の流るる系子... 娘の意

油原

女房後段

の之流るる... 娘の意

秋地

女房後段

月と云ふ... 娘の意

月

御製

秋乃月... 娘の意

秋

お大徳の意

おのほの乃... 娘の意

子

女房丹後

さよかけ... 娘の意

少

後成女

仕度... 娘の意

雷

乞家抄

花山... 娘の意







1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100.

Fig. 1



